
もう一人のうちは

豆腐と納豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人のうちは

【Nコード】

N1504Z

【作者名】

豆腐と納豆

【あらすじ】

うちには転生したチートキャラが織り成す物語

プロローグ（前書き）

うちには転生した物語です。

プロローグ

『ここは一体どこだ？』

気が付くと見知らぬ場所に居た

「来たか」

『誰？』

そこには誰かが居た

「私は新世界の神だ！」

新世界？

『神？』

「如何にも、お主は転生してもらった。
転生？」

『また人生をやり直せと？』

「うむ、好きな能力を10個お詫びにやろう」

「転生先はナルトに決定してるけど」

ナルトかうちは一族がいいな

『生まれる場所自由に選べる？』

「もちろん」

『じゃあうちは一族に生まれ変わりたい』

「して、能力は？」

『白眼』

失明なしの万華鏡写輪眼

複写眼

ギアス

直死の魔眼

限界突破

Fate 宝具全て

卍解と鬼道全て

大嘘憑き

全ての血継限界』

「眼系統が偏ってるな

大嘘憑きか…最近その能力使う人増えてるんだよね」

『気にしたら負けだよ』

「お主には個人的なお詫びとしてチャクラ を授けよう」
無限？私に勝てる奴いないんじゃない？…

「生まれた当初なら勝てるが、修行すれば誰も勝てん！」
チート…

「直死の魔眼の副作用とかはしっかりあるから
頑張って修行するんだぞ！」

脳に負担か…頑張るしかないな。

「では、行つてこい

新たな人生頑張つて

すぐ死ぬなよ？」

『分かつてるつて

行つて来ます。』

「おおー生まれたか」

「ん？どうした？」

「この眼は写輪眼

なぜ、生まれてすぐの子が写輪眼を…」

『おぎゃーおぎゃー』

（あれ？母親死んでるんじゃない？…）

「おい、どうした

し…死んでる」

「この子は悪魔の子か？」

「名前を付けてやるか」

「セツナ、お前の名前はうちはセツナだ」

「貴方生まれましたよ」

「おおー生まれたか」

「お前の名前はサスケ、うちはサスケだ」

「サスケいい子に育つのよ」

「期待してるぞ！サスケよ」

「生まれたか？」

「ミナト、封印するんじゃない」

「九尾をわが子に封印するとは……」

「名前はナルト、うずまきナルトだ」

「ナルト、いい子に育つのよ」

3人の物語が今始まる。

プロローグ（後書き）

誤字脱字があり次第修正します。

時が経つのは何時も速い

初めまして

うちは一族に転生したセツナです。

両親はすぐ死にました。

うちは一族の人は私を嫌ってる様です。

イタチさんだけ普通に喋ってくれます

2年経ちようやく修行に入れます

今は両親の遺産で暮らしてます

うちは一族の場所とかなり離れてます。

生まれながら写輪眼を宿していたおかげで

うちはの鬼才 木の葉の悪魔等と呼ばれてます

『まずは影分身で経験値を稼ぎますか』

そう、とあるだってばよの少年がやっていた修行方

『軽く100体ほどでいいか

多くてもうざいだけだし』

『そういえば後1年でヒナタが誘拐されるんだっけ
助けに行くか、その間修行だな。』

――1年後――

『今日ヒナタが誘拐されるんだな
じゃ、行きますか。』

「ハハハ、これで木の葉の白眼を手に入れたぞ
これで木の葉を潰せる」

何でしょうか、この痛い人は？

『そこまですよ。お馬鹿さん』

「だ、誰だ？ん？餓鬼じゃねえか」

「ちっ、顔を見られちまったからには死んでもらうぜ」
なぜ、顔を隠さないんでしょう？

『縛道の六十一 六杖光牢』

これなら、ヒナタを危険な目に会わないでしょう

「な、何だ。この術は見た事ないぞ！」

『これで終わりです』
ガン。

『よし、気絶しましたね。』

これで日向の死体を渡せと言われないでしょう
『タン』

「ヒ、ヒナタ」

『気絶してるだけですよ』

「お前は確かうちの鬼才」

またその認識ですか…

『その雲隠れの忍は殺さない方がいいですよ』

殺したら、貴方の死体を渡せとか言ってくるでしょうし

「分かった、しかしなぜお前がここにいるんだ？」

まあ、当然の疑問でしょうね。

『夜の散歩です。（キリッ）』

「明日朝１１時に日向に来てくれ
ヒナタを助けくれた礼をしたい」

キリツの部分は無視ですか…

『分かりました』

では、御機嫌よう』

『約束の時間ですね。

では、行きますか』

「よく来てくれた

私は日向ヒアシ」

「私は日向ヒザシ」

「この子達はヒナタとネジと言う」

『それで？お礼と言うのは？』

「うむ、お主は何か欲しい物はあるか？

私達に可能物で頼むぞ」

ふーむどうしようか…

あ、そうだ

『では、私と戦ってください』

自分以外の人と戦った事ないからなあ

「あい、分かった

それで相手は」

『ヒアシさんとヒザシさんの両方です』

『二人一気にしかかってきて下さい』

「それでいいのか？」

『はい、構いません』

「では、行くぞ」

「「白眼」」

いきなり発動ですか。
ならこちらも

『写輪眼』

「さすがに鬼才と言われるだけある
その歳で写輪眼をマスターしてるとは」

『なら、もう一つ驚いてくれますか？』

『白眼！』

「なぜ、うちの子が日向の技を」

『今は試合中ですよ。』

「くっ八卦六十四掌」

普通子供に使いますか？

『八卦六十四掌』

「写輪眼か…」

『まだまだだね』

これで終わりにしましょう

ドン×2

『何とか倒せましたね』

「くっ、まさか子供に負けるとはな」

「なぜうちはお主が白眼を使える？」

どう誤魔化しましょうか？

『集中すれば何となく出来たんです』

「流石はうちの鬼才だな」

「お主日向に來ないか？」

「白眼は日向の秘術

その他の者に知られるのまずいのだ」

うーん、ま、住みかが新しくなったと考えますか
『分かりました』

「お主はこれからアカデミーに通ってもらう

ヒナタと同年だから遊び相手にも丁度いいだろう」
ヒナタか作者はハナビの方が、いや今はよそう
『これからお世話になります。』

こうしてセツナは日向家に住む事になった
そうそう報告する事が一つありました。
ハナビと許婚になりました。
作者の欲求「ガン」いえ、何でもありません。

アカデミー学校

アカデミーに入学する前に色々あった
主にうちは惨殺事件

イタチさんと久しぶりに会話をしたなあ。

サスケを頼んだと言われたが

サスケと会話したけど、仲が悪くなった

『サスケ何処行くの？』

「目障りだ、消えろ」

こんな感じた。

影から守る事にした

今日はアカデミー入学と言うか転入？かな。
クラスはサスケとナルトと同じクラス

「今日は転入生を紹介するぞ」

「――男ですか？女ですか？」――

「男だ！残念だったな男子」

「入っていいぞ」

「自己紹介からしてくれ」

『うちはセツナ

好きな物や人はいない

嫌いな人はサスケだ』

「カッコイイが同じうちはを嫌い？」

「では、席はサスケの隣だ」

『よろしくな、雑魚』

「その口を閉じろ、カス」

「次の授業は手裏剣をあの的に当てるんだ」

「うちはサスケ」

「フン」

ザンザンザンザンザン

「全部命中と」

次うずまきナルト」

「よっしゃーやってやるってばよ」

スカスカスカスカスカ

「全部外れと」

次うちはセツナ」

『はい』

ザンザンザンザンザン

「まさか横一列に当てるとは

しかも幅1ミリ感覚で、さすがは鬼才だな」

「「「「あいつ、サスケより強いんじゃない」「」「」

「次は変化の術だ

俺に化けてもらう」

「うちはサスケ」

ボン

「満点だな」

「次はうずまきナルト」

ボン

「こらあゝナルト俺がいつ女になった

0点と」

「次うちはセツナ」

ボン

「満点だな」

「以上、今日の授業はここまで」

「「「「「ありがとうございました」「」「」「」

俺は学校に行ってる影分身を解いた

それにしてもナルトの成績予想以上に悪いな
ま、関係ないけどさ。

「アカデミーはどうでしたか？」
ハナビだ可愛いなこんにやろー

『ああ、予想以上に楽しめたよ』
ナルトの成績でな

「あ、あのセツナさん」

『ん？なんだい？ハナビちゃん』

「私を鍛えてください

父様に言ったらセツナさんの方が教えが上手いと言ってたので」
余計な事を言いやがって

まあ、いいハナビを魔改造してろう

『じゃ、放課後と休日だけ修行しようか？』

「はい」

何を教えようかな？

螺旋丸でいいや

『明日が楽しみだな』

『じゃ、修行を始めるよ』

「はい」

『まずは身体的強化と白眼を使えるようにしようか』

「私には白眼は早い気がするのですが…」

『大丈夫思ったより簡単だよ』

翌日ハナビは螺旋丸を出していた

たった1日の魔改造であそこまで行くとは…

いやはや恐ろしいね。

ハナビはアカデミーに入学が決まったのであった
『そういえばどのクラスか聞いてないな』

「転入生を紹介する
入ってきなさい」

「日向ハナビです。」

好きな食べ物は何にもありません
好きな人は言えませんが「チラッ
ん？ハナビがこちらを見たが
まさかな

「嫌いな人もいません
仲良くして下さい」

クラスの女子の半数「「「「「（ライバルが増えた！！）」「」「」」」」」」
「席はうちはセツナの隣でいいか」

「よろしくね、ハナビちゃん」

私は笑顔で言った

ハナビとセツナを除くクラス一同「「「「「（笑ったの初めて見た
！）」「」「」」」」」」

「はい、よろしく願いしますセツナ様」
ん？様？

『何で様付けなの？』

「いえ、私も遅れをとる訳には行きませんから」

（まさか、セツナ様を好きな人がここまできるとは思いもしませんでした）

（これは積極的に攻めていくべきですね）

こうして、アカデミー転入生事件

セツナが笑ったが校内全体に伝わるのであった

アカデミー班分け

卒業試験も楽に突破し班分けだ

イレギュラーの私はどの班になるんだろ？

「次7班

うずまきナルト 春野サクラ うちハサスケ」

予想通りだね。

何かナルトがぎゃーぎゃー騒いでるが無視しよう

「次8班

奈良シカマル 秋道チョウジ 山中イノ」

「次9班

油女シノ 犬塚キバ 日向ヒナタ」

「次10班

うちはセツナ 日向ハナビ

以上だ」

「先生10班だけ偏ってます」

「その代わりお前達は3人1組だ

これは公平な判断なんだ」

「各教室に放課後担当上忍が来る

それまで待機だ！」

「来ましたね私達の担当上忍」

『そうだね』

どんな奴だろう？私と同じイレギュラーか？

ガラ

「俺が君達の担当上忍

桜井 ツバサだ」

ツバサ？イレギュラーかな？

原作では登場しないキャラだな。

「明日君達の実力を見たいから試験をやる
落ちたらアカデミー生からやり直した」

（落ちるわけがないんだけどね、この私が）

「分かりました」

『了解』

「以上、今日は解散」

「セツナ様帰りましょう」

『うん、いいよ』

明日どんな試験やるんだろう？

カカシと同じ試験かな？

楽しみだな！

「よし集まったな
実力試験だ」

「俺と1対1で戦ってもらおう」

え？そんな簡単な試験でいいの？

「では、日向からだ」

「よろしく願います」

「開始」

「白眼」（ギン）

「（さすがに鬼才に鍛えてもらってるだけあるな）」

「（体術もいい、幻術は並より上程度だな）」

「螺旋丸」

「（あ、あぶね〜何で下忍が螺旋丸覚えてんだよ）」

「よし合格、次うちはセツナだ」

『よろしく願います』

「（こいつだけは本気で行くかな）」

どうやって戦うか、体術だけでいいや

『ハアーーーー』

「（何て餓鬼だ！撃で腕が折れやがった）」

「合格！二人とも下忍として認めよう」

「（日向は中忍、うちはの餓鬼は上忍以上の実力だぞ）」

「では、明後日から任務を開始する」

「以上、解散！」

こうして時は流れた

「突然の呼び出し？そうか、中忍試験か」

火影の部屋

「今年も中忍試験に推薦する人はいるかの？」

「カカシ班率いる第7班

うずまきナルト　うちはサスケ　春野サクラ

畑力カシの名をもって中忍試験に選抜します。」

「アスマ班率いる第8班

奈良シカマル　秋道チョウジ　山中イノ

猿飛アスマの名をもって左に同じ」

「紅率いる第9班

油女シノ　犬塚キバ　日向ヒナタ

夕日紅の名をもって左に同じ」

「ツバサ率いる第10班

日向ハナビ　うちはセツナ

桜井ツバサの名をもって左に同じ」

「全員推薦とは珍しい、以上解散各々自分に班員に伝えよ」

「セツナ、ハナビお前達を中忍試験に推薦しといたから」

「私にはまだ早いと思うのですが…」

『大丈夫いつも通り頑張ればいいんだよ』

俺は笑顔で行った

「は、はい／＼／」

照れてるのか、可愛いな

「明日試験会場に集合だ、いいな？」

「『はい!』」

明日が楽しみだ!

中忍試験開始

ふう〜周りが騒がしいが

ハナビには白眼で私の回答を見るように伝えたから

1次試験は合格決定だな。

「俺は森野イビキ

試験を始める」

「試験開始」

『（楽勝だな）』

「（白眼）（これでセツナ様の回答を見れば）」

「よし45分経った

これより問10問を出す」

「まずお前らに受けるか受けないかを選んでもらう」

「受けないを選べば失格で班のお仲間2名も道連れ失格だ」

「受けるを選び正解できなかったら、その者の中忍試験受験資格を永久に剥奪する」

「そんな馬鹿なルールがあるか！

現にここには何回か中忍試験を受けに来た奴だっているんだぜ」

「フフフフ、運がないんだよお前ら、今年は俺がルールだ」

「お、俺は受けないすまない」

「130番、111番道連れ失格」

「お、俺も受けない」

「私も受けない」

「ボクも受けない」

「さあ、人生を賭けた選択だぞ！」

「なめんじゃねー俺は逃げねーぞ」

受けてやる、もし一生下忍でも意地でも火影になるから別にいいっ
てばよ

怖くなんかねーぞ！」

「もう一度言う人生を賭けた選択だぞ」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねーそれが俺の忍道だ！」

「では、ここに残った者達全員に

第1次試験合格を申し渡す」

パリーン

「あんた達喜んでる場合じゃないわよ

私は第2試験管みたらし アンコよ次行くわよ次！」

「空気読め！」

「ん？まさか白紙で1次試験を通るとは
うずまきナルトか面白い奴だ！

それと、うちはセツナか

試験開始3分で1問から9問を解いたか
たった3分とは流石鬼才だな。」

2次試験 死の森

「ここが死の森よ」

「試験内容は至ってシンプルよ」

貴方達各班に天の書と地の書を開始前に一つ渡すわ

ゴールの中央の塔がある。

ゴールまでに天と地両方の書を揃えて持ってくる事それが条件よ」

「失格条件は

天か地の書をゴールする前に開いたり

時間内に辿り着けなかった者

班全員でこない者

死者または再起不能者を出した班は失格よ」

「後はギブアップなし

それじゃ開始前に一言

死ぬな」

『ここが私達のスタート地点ですね。』

「はい、頑張らしましょう！」

（うーん少し本気出そうかな

『ハナビちゃんは開始と同時にここで待ってて

私がすぐ地の書を奪ってくるから』

「え？でも、それじゃセツナ様が危険に…」

『お願いハナビちゃん！』

「じゃ、私からもお願いです

ちゃん付けはやめて下さい

ハナビと呼んで欲しいのです」

『それが条件？』

「はい、それが条件です」

『分かったよハナビ』

「後1分でスタートです。」

『じゃ、ここで待っててね
すぐ奪ってくるから!』

「分かりました」

「第2次試験スタート!」

『瞬歩』

「消えた?」

『お、発見ここまでかった時間は10秒か』

『約束された(エクス)勝利の剣^{カリバー}』

『お、地の書だ!』

(大蛇丸と言う変態に遭遇したくないからさっさと行こう)

『ただいま』ここまでにかかった時間10秒

戦闘時間1秒

「え?もう奪ってきたんですか?」

「は、早すぎですよ」

『じゃ、お姫様だつこで行こうか?』

勝者の余裕でww』

「は、恥ずかしいです///」

『いいから、いいから』

『お、ゴール』

ここまでのかかった時間4分39秒
合計5分

『誰もいないや...』

「あ、当たり前です」

『残りの5日間どうしようか?』

「アンコさん」

「ん？何だ？脱落者でも出たのか？」

「そ、それが……ゴールした者がいるそうです」

「何？まだ5分しか経ってないぞ」

「ちゃんと天地両方の書を持ってるのか？」

「はい、確認したところ間違いありません」

「ゴールした者の名前は？」

「日向ハナビとうちはセツナです」

（あの鬼才か一体どんな速度で走ったんだ？）

「まあ、いいわゴールしたのなら」

「引き続き試験を見るのよ」

「はい、分かりました」

試験終了

原作通りですね。

結構強そうな人が残りましたね。

私レベルだとただのくだらねーカスなんだけどね

「恐れながら火影様ここは
審判を仰せつかった月光八ヤテから」

「任せよう」

「それでは、みなさんゴホッ

本戦の出場を賭けた第3次予選を始めますゴホッ」

「今回の第1次2次試験は甘かったので

第3次予選で人数を絞ります」

「今すぐに開始しますのでゴホッ

棄権したい方は言って下さい」

カブトが棄権したか…

原作だと

サスケとアカドウとか言う雑魚だったな。

「あの画面を見てください

対戦相手を表示しますゴホッ」

一回戦 日向ハナビVS雑魚A

「い、いきなり私」

「フン、何処の馬の骨だ」

『頑張ってハナビ

私は応援してるからね』

「は、はい頑張ります！」

（落ち着け、いつもセツナさんと戦っている時と同じ様にすればいいんだ）

「それでは日向ハナビVS雑魚A開始」

「螺旋丸」

「グハア…」ドサッ

「そこまで勝者日向ハナビ」

『おめでとうハナビ』

「ありがとうございます」

二回戦 我愛羅VS雑魚B

「フン」

「どこの雑魚だ？」

「それでは我愛羅VS雑魚B開始」

「砂縛柩」

「ア…ガ…」ドザッ

「そこまで勝者我愛羅」

三回戦 うちはセツナVSロック・リー

「おおーやつと僕の出番がきたー」

『本気で倒そうかな…』

「それではうちはセツナVSロック・リー開始」

『リーさんでしたね、裏蓮華を出して下さい』

「しかし」チラッ

「構わんリー行けー俺が許す」

「オッス、ガイ先生」

第1開門 解

第2休門 解

第3生門 解

第4傷門 解

第5杜門 解

「これで最後です、裏蓮華」ズガン

「あいつ死んだんじゃないか？」

「あれをまともに受けたら無事じゃすまないね」

『結構痛いねこれ！』

「そんな裏蓮華をまともに受けて傷付いてないなんて」
『それじゃ、本気を出すよ』
死んでも生かえてあげることから安心してね!』

『影分身の術』 19人出したオリジナルを含め20人

『雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ六杖光牢

じゃくほうらいじうへん

雀蜂雷公鞭

かみしにのやり

神殺鎗

しゅうけい・はくていけん

終景・白帝剣

ひこつたいほう

狒骨大砲

こくじょうてんげんみょうおう

黒縄天譴明王

ひょうてんひやつかそう

氷天百華葬

りゅうもんほあすきまる

龍紋鬼灯丸

げつがてんしょう

月牙天衝

エクスカリバー

約束された勝利の剣

エヌマエリシュ

天地乖離す開闢の星

ゴルディアス・ホイール

神威の車輪

ゲイ・ジャルゲ

破魔の紅薔薇

カリバーン

勝利すべき黄金の剣

ブローケン・ファンタズム

壊れた幻想

ゲイボルグ

刺し穿つ死棘の槍

秘剣・燕返し(ひけん・つばめがえし)

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝

滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し 痺
れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の
人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ 破道の90
黒棺

千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手 光を落とす道
火種を煽る風 集いて惑うな我が指を見よ 光弾・八身・九条・天
経・疾宝・大輪・灰色の砲塔 弓引く彼方 皎皎として消ゆ 破道

の91 千手皎天汰炮』

おつとオーバーキルしちゃったかな？

『あれ？会場の皆が驚いてる』

「リー大丈夫かリー」

「し…死んでる」

「「「な、何だあいつは！？」」「」

『あのガイさん？リーさんを復活させますから、どいてくれませんか？』

「「「は？死人を復活させる？」「」

『大嘘憑き』

「あれ？僕は一体」

「リー良かった」

『審判勝敗は？』

「勝者うちはセツナ」

『ただいまハナビ』

「お帰りなさい

あのあれがセツナ様の本気ですか？」

『んー？大体6割かな』

「あれで6割ですか…」

『さてと残りの試合に興味ないから終わったら起こしてね』

『ん？終わった？』

「はい今からクジを引くんです」

「では、各自引いた番号を言え」

対戦相手はこうなった

うずまきナルトVS日向ネジ

うちはサスケVS我愛羅

日向ハナビVS油女シノ

テマリVSドス・キヌタ

奈良シカマルVSうちはセツナ

「（何で俺がセツナ何だよ、あいつに勝てる奴いねーだろ）」

「シカマル、頑張れってばよ」

「では、各自今日は解散、明後日に集まるように」

こうして中忍試験もいよいよ終盤に入るのであった

木の葉崩し

ほぼ原作通りだね
ナルトが勝ち

「次の試合油女シノVS日向ハナビ」

「すまない俺は棄権する。」

「ちつめんどくせえな」

「次の試合テマリVSドス・キヌタ」

「私は棄権する」

「またかよ」

「次の試合奈良シカマルVSうちはセツナ」

『私は棄権します』

「「「な？棄権？」「」」

ボンッ

（やっと現れましたねサスケ）

そろそろ変態が動き出す頃合ですね。
幻術返しでもしますか。

『「「「解」「」』

「我愛羅は役に立たなかったか

クククク」

「そうか、そういう事が大蛇丸!!」

「ではまた戦いましょう猿飛先生」

「手裏剣影分身の術」

「口寄せ・穢土転生!」

「一つ」

「くっ死人を盾に使うとは」

「二つ」

あの術三つ目は阻止しなければ

「三つ」

「さあ、どうします?猿飛先生」

「歳をとったのう猿よ」

「弟子と戦う事になるとはな」

「まさか貴方が相手とは…」

「覚悟して下され初代様、2代目様、4代目」

「火遁・火龍炎弾」

「水遁・水陣壁」

「水遁・水龍弾&螺旋丸」

「土遁・土流壁」

「木遁・秘術・樹界降誕」

『木遁・秘術・樹界降誕&螺旋丸&千鳥』

『さてと、さつさと終わらせますか』

『散れ千本桜』

直死の魔眼発動してるから

千本桜で相手を切り殺す

『後は貴方だけですな、大蛇丸』

「流石は木の葉の悪魔ね」

初めて言われた気がする

「どう、私の下へ来ない?」

『だが断る』

『ここは素直に退いた方がいいと思いますよ』

「貴方さえいなければ木の葉崩しは完了したのに
まあ、いいわ今日は退いてあげる」

「では、また会いましょう」

猿飛先生、木の葉の悪魔」

こうして大蛇丸の木の葉崩しは失敗した
騙されてた砂の忍は木の葉に全面降伏。
里の復旧に励むのであった。

中忍試験の結果は次回明かされる。

木の葉崩し（後書き）

更新日は

月曜と水曜と金曜です。

まあ、その日以外忙しいのでww
ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1504z/>

もう一人のうちは

2011年12月5日20時01分発行